

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 5月27日現在

機関番号：17501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2012

課題番号：23730585

研究課題名（和文） 時間的広がりを持った感情理解の発達プロセスの解明

研究課題名（英文） The clarification of understanding temporally extended emotions development process.

研究代表者

麻生 良太 (ASO RYOTA)

大分大学・教育福祉科学部・准教授

研究者番号：10572828

研究成果の概要（和文）：これまでの感情理解研究では、主に自他が抱く感情は、現在の状況の中にある原因によって起きているという理解について検討していた。本研究では、感情の理解は他者との関係の中で理解されると考え、感情生起の原因となる相手に内的特性を付与し、実験を行った。その結果、感情理解の発達には、やりとりする相手の心的状態、特に内的特性をふまえて感情の理解をできるようになることが重要な要因であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：By emotion understanding research, the emotion which oneself and others mainly bear was considering an understanding of having occurred according to the cause in the present situation. In this research, an understanding of emotion thought that I was understood in a relation with the others, and experimented on the partner leading to feeling occurrence by giving the inner characteristic. As a result, it became clear that it is a factor with important for development of emotion understanding coming the mental condition of the partner who communicates, and to be able to perform an understanding of emotion especially based on the inner characteristic.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会的相互作用・対人関係・認知発達心理学

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの感情理解研究では、主に自他が抱く感情は、現在の状況の中にある原因によって起きているという理解(以下：現在に限定された感情理解)について検討してい

る。しかしながら、現実の人間関係では、「時間の広がり」を踏まえて感情を理解することがほとんどである。こうした現在のみに留まらない、過去-現在-未来という時間の連続性の中に自他を表象して、感情の理解(時間的

広がりを持った感情理解をすることは、時間と同様に連続性がある人間関係を維持、発展していく上で必要不可欠なものであることは言うまでもない。したがって、時間的広がりを持った感情理解の発達プロセスを明らかにしていくことは、これまでの感情理解研究に、新たに「時間の広がり」という側面を加えるだけでなく、豊かな人間関係が構築・維持されていく原因を感情理解の側面から説明することができるという点で、非常に意義のあるものと考えられる。

(2) しかし、今までの先行研究で明らかにされてきた時間的広がりを持った感情理解に関する研究は、何歳ぐらいから時間的広がりを持った感情理解ができるのかという、年齢を特定することが主であった。これらの研究は、あくまでも、時間的広がりを持った感情理解の発達の大まかな傾向を掴んだにすぎない。そこで時間的広がりを持った感情理解の発達を明らかにするための研究を行った。

(3) 麻生・丸野(2007)は、時間的広がりを持った感情理解の発達を感情生起の原因となる対象(人か人以外か)の広がり(対象条件)の観点から検討した。その結果、感情理解には自他の関与に関係なく同時に発達することや、意図を持った対象(人や動物)との相互作用の中でのみ理解される発達段階があることが示唆された。また、麻生・丸野(2010)は、時間的広がりを持った感情理解の発達は、推論の仕方の発達の差異、すなわち現在の状況に依拠した推論から他者の思考に依拠した推論への発達の变化を反映していると想定した。結果は仮説を支持するものであり、時間的広がりを持った感情理解の発達変化は推論過程の変化に起因する、また、

4歳頃を境として、状況に依拠した推論から他者の思考に依拠した推論へと変化することを示唆した。

(4) 麻生・丸野の一連の研究は、時間的広がりを持った感情は、年を重ねるだけで自然と理解されるわけではなく、意図を持った対象(多くの場合、それは親や兄弟や先生、そして友だちであろう)とのやりとりの中で、徐々に理解されるものであるという、対人経験の要因が関わっているという、非常に興味深い結果を示している。ただし、これらの研究は、あくまでも、時間的広がりを持った感情理解の発達の大まかな傾向を掴んだにすぎない。

2. 研究の目的

(1) 本研究は幼児教育において近年強調されている、子どもの「豊かな心や健やかな体の育成」の達成に寄与するために、子どもの感情についての知識(以下、感情理解)の発達を、感情理解の機能である人間関係の維持という視点から明らかにすることを目的とする。具体的には、横断的研究を行うことで、これまでの研究では明らかにされてこなかった、幼児が持っている感情についての豊かな知識と、その知識が顕在化する状況・背景を明らかにする。そしてこれからの教育実践に対して、今回の結果から何を提案できるかを考察する。具体的には以下の2点について明らかにする。

(2) 本研究の目的の1つは、時間的広がりを持った感情理解とワーキングメモリとの関連を明らかにすることである。これまでの幼児期の心の理解とワーキングメモリとの関連を調べている研究では、ワーキングメモリ課題の成績と「心の理論」課題の成績との

間に有意な相関がみられることが明らかになっている(小川・子安, 2008)。そして小川・子安(2008)はこの結果から、自己視点を抑制し、他者視点を活性化するという操作を可能にするワーキングメモリ容量が、誤った信念の理解に必要であるとしている。本研究では、心の理解において重要な要素である時間的広がりを持った感情理解とワーキングメモリ容量の関連について実験を行った。

(3) 本研究の目的の2つ目は感情の生起の原因となった相手に付与した内的特性に着目し、相手へ付与した内的特性が、時間的広がりを持った感情理解とどのような関連があるかを調べることである。

3. 研究の方法

(1) 時間的広がりを持った感情理解とワーキングメモリとの関連に関しては、実験参加児は年少児、年中児、年長児各20名であった。時間的広がりを持った感情理解課題として、実験参加児に以下の内容の紙芝居を聞かせた。①ある所にさとこさんとのぞみさんがいました。②ある日、さとこさんが一人でお砂場でお山を作っていると、③のぞみさんがやってきて、「私も一緒にお山作ってもいい?」と聞きました。でも、さとこさんは「今は一人で作りたいからダメ」と言いました。④すると、のぞみさんは「なんでダメなの? ケチ!!」と言って、お山を壊してしまいました。⑤その後、さとこさんはお昼ご飯を食べて、⑥鉄棒で遊んでいました。⑦そこへ、のぞみさんがやってきました。そして、⑦の場面で「さとこさんはのぞみさんを見て、どんな気持ちになるかな?」と4つの表情図を提示しながら尋ねた。

ワーキングメモリ課題として、小坂(1999)のリスニングスパンテストを用いた。実験参

加児に課題文呈示直後に文頭の単語の再生を求めた。課題文数は1桁刺激文から1文ずつ増えていき、正確に再生できなければそこで試行を終了した。

(2) 感情生起の原因となった相手へ付与した内的特性と時間的広がりを持った感情理解との関連に関しては、実験参加児は3歳児15名、4歳児・5歳児各20名で行った。時間的広がりを持った感情理解課題は実験参加児に以下の内容の紙芝居を聞かせた。①ある所にたけし君とさとる君がいました。②ある日、たけし君がお砂場でお山を作っていると、③さとる君がやってきて、「今から砂場で遊ぶからどけよ」と言って、④たけし君が作ったお山を思いっきり蹴って壊してしまいました。⑤お昼になったので、たけし君はお昼ご飯を食べました。⑥そして、またお砂場でお山を作っていると、⑦向こうから、またさとる君がやってきました。課題質問として、紙芝居の場面⑦の時点で、実験参加児に4つの質問を行った。1. 主人公が抱く感情の推論として、相手を見て「嬉しい」か・「悲しい」か。2. 相手への内的特性の帰属として、お山を壊した相手が現れたときに、その相手に「意地悪」と帰属するか・「優しい」と帰属するか。3. 主人公に対する行為の有無として、相手は、この後主人公に「何かする」か・「何もしない」か。4. 相手と遊びたい気持ちの有無として、この後相手と一緒に「遊びたい」か・「遊びたくない」か。

4. 研究成果

(1) 時間的広がりを持った感情理解とワーキングメモリとの関連に関しては、成果は以下の通りであった。各学年における感情理解の得点とリスニングスパンの得点の平均点と標準偏差を示す。

Table 1 各学年における感情理解の得点およびリスニングスパンの得点

	外的状況	時間的広がりをもった感情理解	リスニングスパン
年少児 (n=20)	0.80 (0.41)	0.45 (0.51)	1.15 (0.75)
年中児 (n=20)	0.85 (0.37)	0.80 (0.41)	1.85 (0.49)
年長児 (n=20)	1.00 (0)	0.85 (0.37)	2.15 (0.59)

()内は標準偏差

各課題で分散分析を行った結果、UTEE とリスニングスパンテストにおいて、年少児よりも年中児・年長児が課題の成績が高いことが明らかになった。

次に、各課題間の相関係数を示す。

Table 2 相関係数

	外的状況	時間的広がり	リスニングスパン
外的状況	—	.555*(.507*)	.143 (.004)
時間的広がり	—	—	.492*(.382*)
リスニングスパン	—	—	—

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

()内は月齢の影響を除いた偏相関係数

直近の外的状況に基づく感情の理解とワーキングメモリの間に関連は見られず、UTEE とワーキングメモリとの間に関連が見られることが明らかとなった。

本研究の結果から、時間的広がりをもった感情理解をするためには、実験参加者自身が持っている知識 (視点) をあてはめるのではなく、その視点をいったん脇におき (抑制し)、主人公 (他者) の視点を活性化することで抱く感情を推論することが必要であることが示唆された。

(2) 感情生起の原因となった相手へ付与した内的特性と時間的広がりを持った感情理解との関連に関しては結果は以下の3つにまとめられた。①感情の推論と相手への内的特性の帰属との関連については主人公が抱く感情を「悲しい」と推論したほぼ全員が、相手を「意地悪」と回答した。②感情の推論と主人公に対する行為の有無との関連については、4歳から、「悲しい」感情と、相手がまた「何かする (意図)」ことを関連づけるようになる。③感情の推論と相手と遊びたい気持ちの有無との関連については、年齢に関係なく、主人公が「悲しい」と推論し

た幼児は、この出来事が今後の関係 (一緒に遊ぶ) に影響を与えると回答した。これらの結果から、時間的広がりを持った感情理解において、就学前期の子どもは感情生起の原因となった相手に対して、適切な内的特性を付与し、その内的特性に基づいて感情を推論している可能性が示唆された。

(3) 本研究から教育実践に対して提案できることを述べる。人は感情を抱くとき、その感情の生起の原因にも目を向け、原因に対し何らかの意味づけをしている。そしてその意味づけの中身が、その後の人間関係に影響を与えている。この知見を、子育てや保育の実践に生かすことを考える。子ども同士や親と子ども、子どもと先生との関わりの中では、嫌な気持ち、嬉しい気持ちを抱くことが多々ある。その際、大人はよく子どもがした「行為」に注目し、その行為をしたら相手がどんな気持ちになるか考えさせることがよくある。それを行為だけでなく、その結果として自分が友だちにどう思われるのか (どのような内的特性を付与されるのか) を考えさせることが大事である。行為は自分の内面への帰属として返ってくることを理解させることも、良好な人間関係を形成するうえで大切なことである。この考え方は、普段周りの友だちから「意地悪」と思われている子どもに対する認識を変化させるときにも役立つ。「意地悪」と思われている子どもが友だちや先生が嬉しい気持ちになるような行為をしたとき、その行為だけを褒めるのではなく、ポジティブな内的特性を明示的に繰り返し付与してみるのが重要である。内的特性への認識が変化することで、「意地悪」と思われている子どもへの周りの子どもの関わり方にポジティブな変化が起き、そのポジティブな変化を感じた子どもがさらにいい行為をする動

機になる。生起した感情と、感情の生起の原因となった他者への内的特性を明示的につなげるような教育的介入をすることで、正のループを生み出すことができると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

(1) 麻生良太, 乳幼児期の社会的ルールの学び, 発達, 査読なし, 125, 2011年, 5-32.

〔学会発表〕(計2件)

(1) 麻生良太, 時間的広がりを持った感情理解と性格特性の理解との関連, 日本発達心理学会第24回大会, 2013年3月17日, 明治学院大学.

(2) 麻生良太, 時間的広がりを持った感情理解とワーキングメモリの関連性, 九州心理学会第73回大会, 2012年11月11日, 鹿児島大学.

〔図書〕(計1件)

(1) 麻生良太, 金子書房, 他者とかかわる心の発達心理学, 2012年, 129-145.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

麻生 良太 (ASO RYOTA)

大分大学・教育福祉科学部・准教授

研究者番号: 10572828